こども宅食とは

単なる食支援ではなく、定期的な食支援を ツール に、
つながりを作り、子育て家庭を伴走する事業です

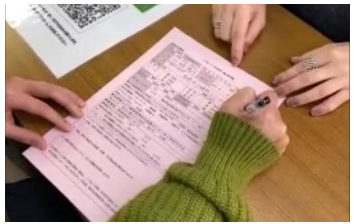
事業イメージ:集めた食品を定期的にお届け。声掛けをしながら、その後の相談などにつなげる

食品確保・保管

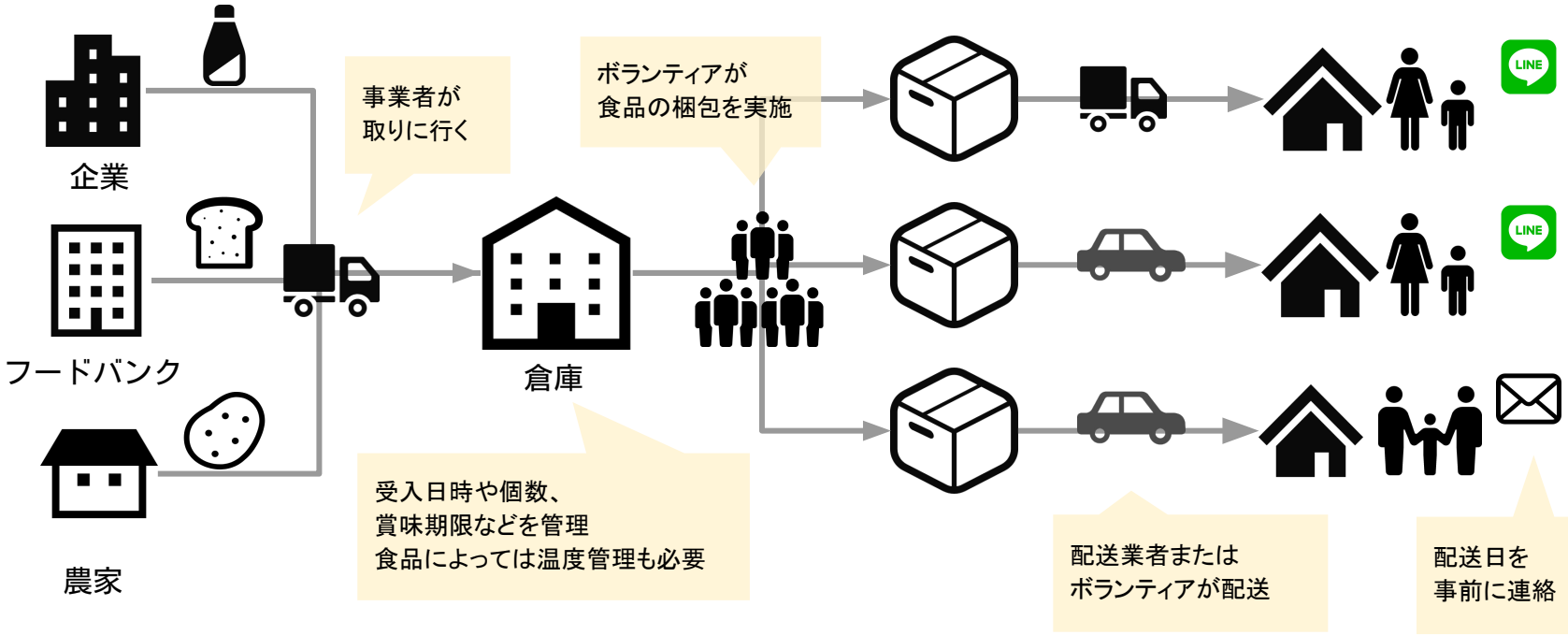
配送準備・梱包

配送・見守り

相談など



【食品提供の流れ・物流】農家や企業、フードバンクから寄付で頂いた食品を倉庫に保管。配送前に梱包して個別に配送するのが基本の流れ。



こども宅食で出会った家庭から見る、
子ども支援政策・福祉の課題

こども宅食を届けたい家庭

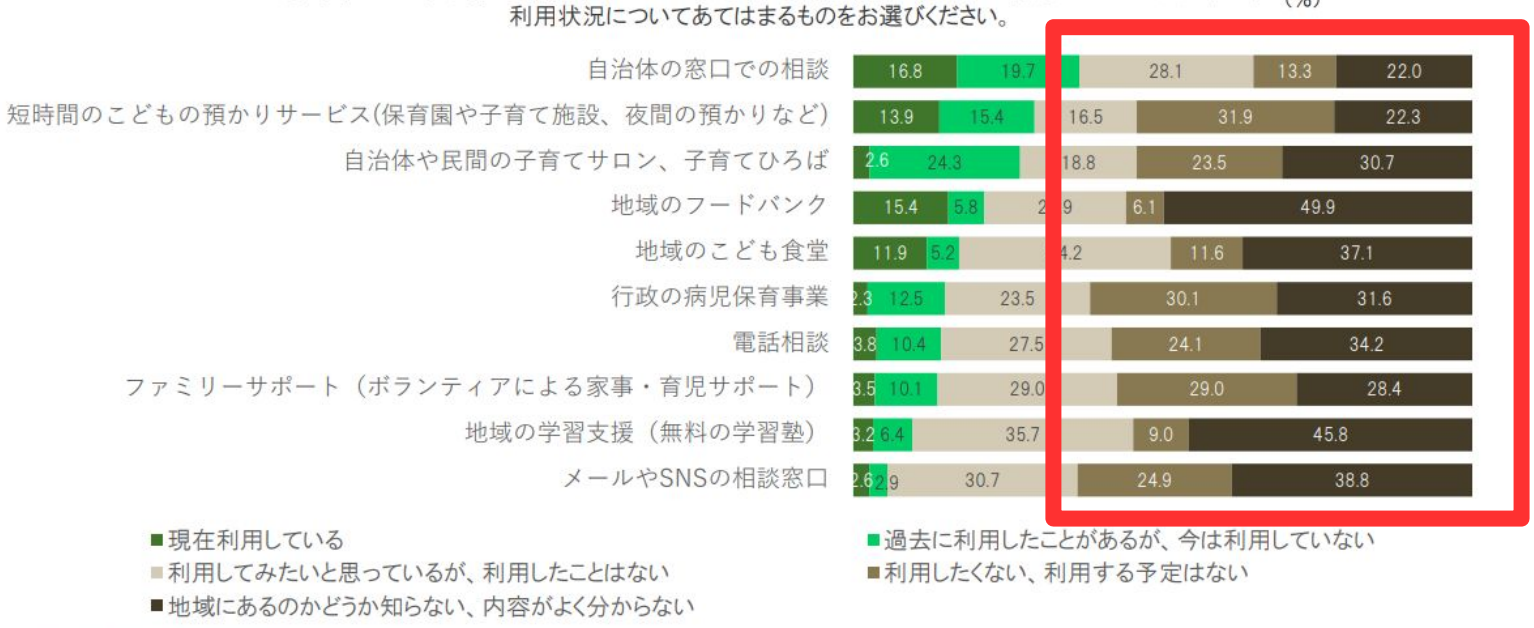
こども宅食応援団に届いたご家庭の声です。さまざまな事情で支援を受けることが難しいご家庭に対しては、窓口での相談や情報提供だけでは支援につなげるのが難しい現実があります。

- 貧しい、生活が苦しいというのは周りに知られたくなくて…
- 病気なのに、なんでこどもを産んだのって言われそうでいや。
- 難病で恥ずかしい病気だから知られたくないんです。かっこ悪い。
  この辺の民間の支援団体につなぐとかしないでください。
- 保育園のママ友が区役所で働いていて、自分の状況を知られるのが怖い。
- 昔、支援を受けたときに嫌な思いをしたことがあって…
  できるだけ関わりたくないんです。
- 相談に行きたくても、ガソリン代や駐車場代を出すお金の余裕がないんです。
- 仕事を掛け持ちしながら子育て。夜遅くに帰ってきて、平日に窓口に行く余裕なんかない。

※個人の特定を避けるため、主旨が変わらない範囲で一部改変を加えています

過去の調査でも、地域にはさまざまな社会資源があるが、困難を抱える<u>家庭の半分近くが「知らない・内容が分からない」、利用意向が低い／無い</u>と回答。既存の方法では、家庭に支援が届きにくい現状がある。

生活に困ったとき、子育てに悩んだときなどに、地域の支援、福祉サービスを利用したことはありますか。
利用状況についてあてはまるものをお選びください。



こども宅食利用家庭に関する実態調査(n=354)

支援が届きにくいのは、様々な障壁や制約が存在するから

情報の伝達、手続の複雑化

とにかく自治体の支援の情報も**こちらから調べないと分からない**し、支援自体が少なすぎる。

日本語が不自由で書類を書くことができない。
手続が面倒でサービス利用を諦めたことがある

本人による課題認知の不足

自分たちは困っていない。
（困っていることに気付いていない）

経済的に困窮しているが、中長期的な見通しが立てられない。**何をどうしたらいいか、分からない。**

心理的な障壁（拒否感・警戒感）

昔、支援を受けたときに嫌な思いをしたことがあって。**もう関わりたくない。**

家計も赤字だし、子育てもうまくできていないし、
人に知られたら**「親として失格」と思われる**のでは

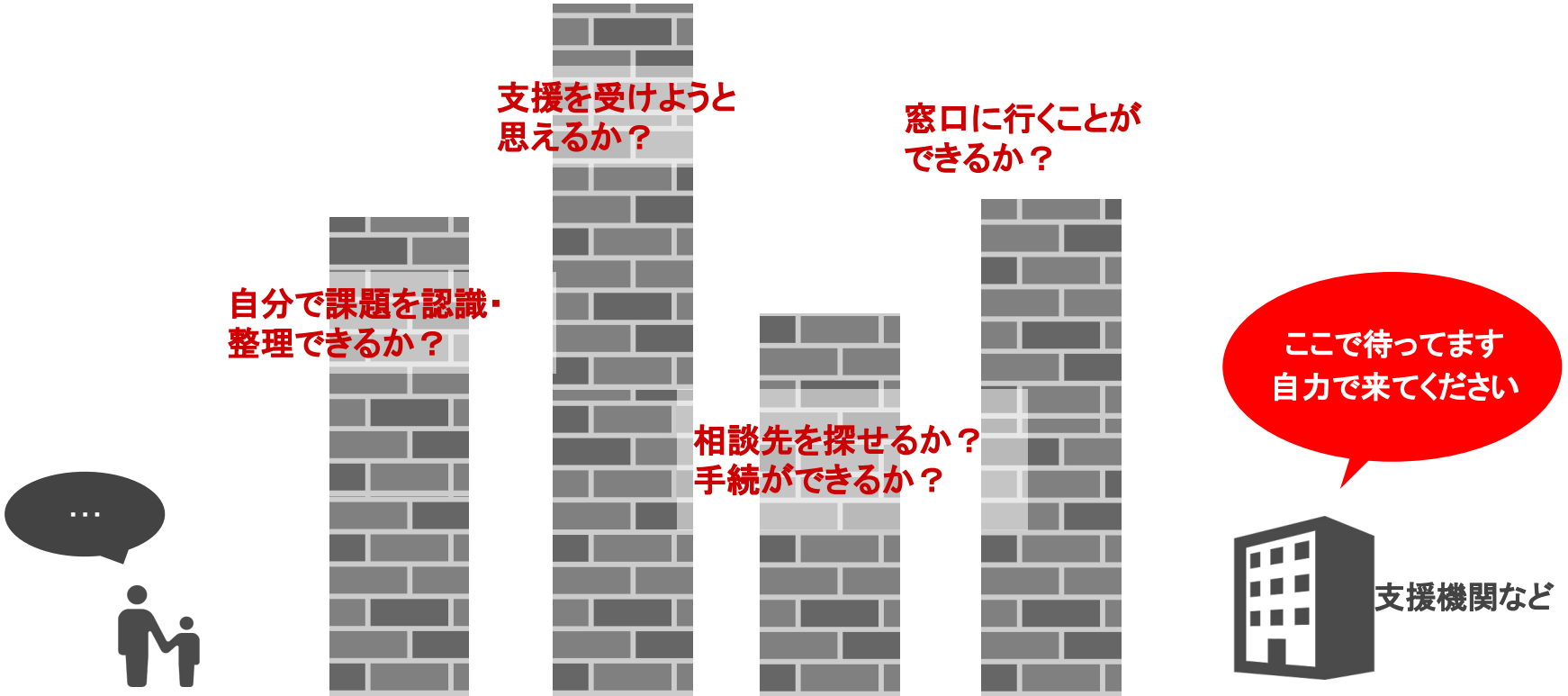
物理的な制約

仕事を掛け持ちしながら子育て。
平日の昼間に窓口に行く余裕がない。

フードバンクやこども食堂に行きたくても、**ガソリン代や駐車場台を出すお金の余裕がない**んです。

子ども支援政策・福祉の課題＝「申請主義」の問題

本人が適切な支援や相談に辿り着く前に、さまざまなハードル（障害）があり、これらの障害を全て乗り越えた人だけが支援を受けられる構造になっている



社会の変化＝身近な「伴走者」の減少

地縁・血縁などがあるなかで子育てを行っていた昔と比べ、現代では 周囲に助けが少ない「子育て家庭の孤立化」が課題になっている。

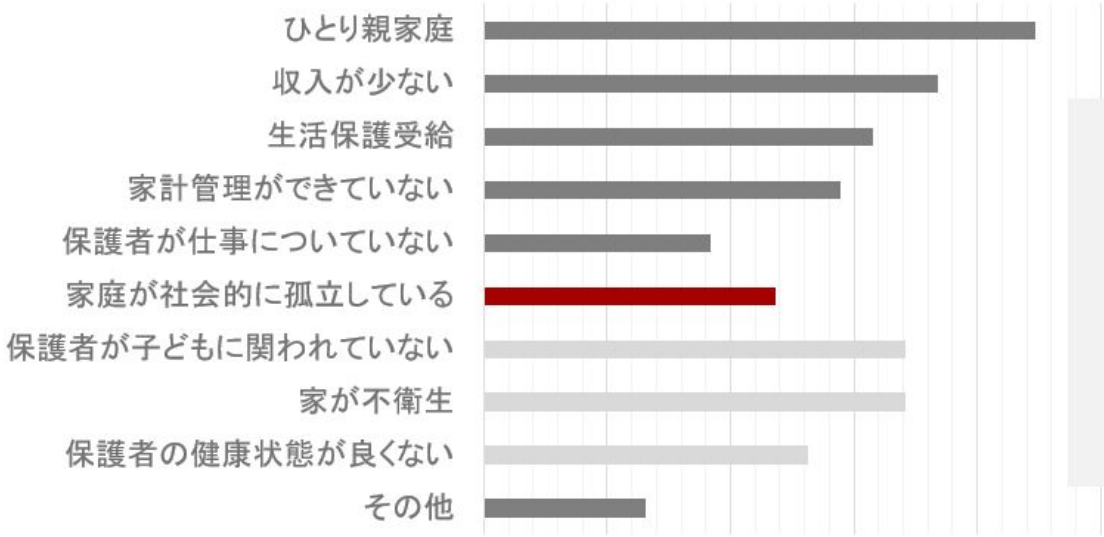
◆母親自身が育った市区町村以外で子育てをしている　**7割**

◆子どもを預かってくれる近所の人がいない　**6割**

※ＮＰＯ法人子育てひろば全国連絡協議会「地域子育て支援拠点における「つながり」に関する調査研究事業報告書」（2017年）
（全国の地域子育て支援拠点事業を運営する団体（計240団体）の利用者について、各団体において任意の開所曜日・時間に１拠点あたり10人程度に無作為配布するよう依頼し回答を得たもの（有効回答数1136人））

長崎県：子どもの支援現場の支援員に調査

背景に貧困が伴うと考えられる子どもがいる世帯に多く見られる困難な状況 （N=19/複数回答可）



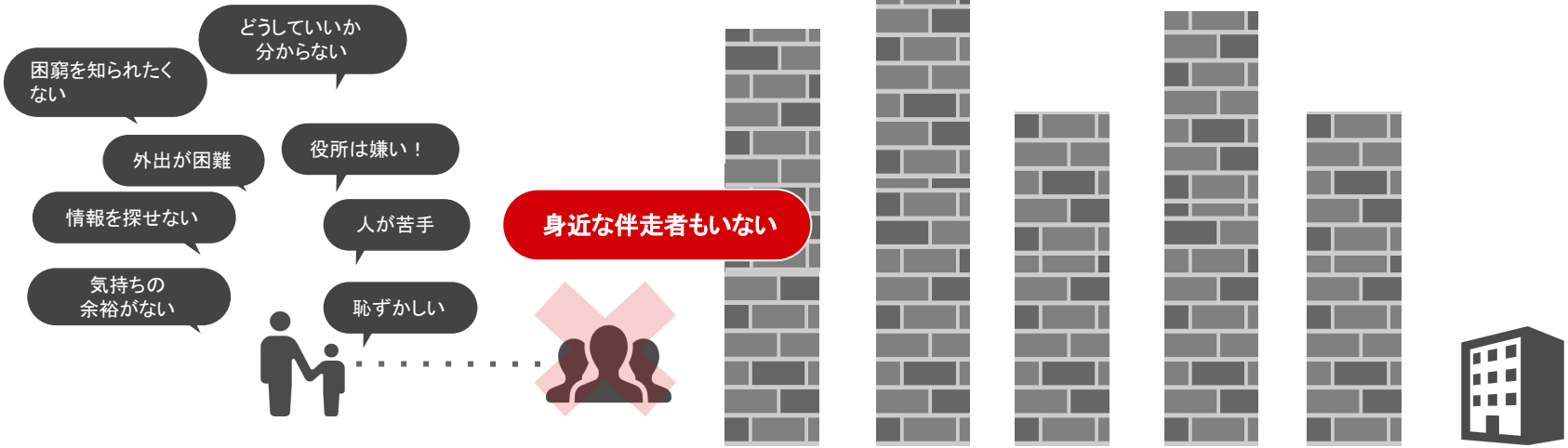
「家庭が社会的に孤立している」と回答した支援者

47.4%

平成31年3月 長崎県子どもの生活に関する実態調査報告書 p.131

つまり、まとめると･･･つながりづらい、支援が届きにくい親子が置かれている状況

困窮や生活課題 × **社会的な孤立**



支援を必要とする家庭はどこにいるのか？

ただ待っているだけでいいのか？

「助けて」が言えない家庭に何ができるのか？

「こども宅食」の機能とは

～つながりにくい親子や支援が届きにくい親子に
実際にリーチできた事例や家庭の変化から考える～

実際のある利用家庭の例

母親に**軽度の知的障害の疑い**がある、ひとり親家庭。
保育所から「子どもが食べていない様子なので、様子を見に行ってほしい」とこども宅食事務局に紹介があった。

本人は、**自分ではきちんと自活できており、支援は不要という認識**だが、食事の提供も含め養育が難しい状況。

定期的なこども宅食の接点を通じ関係が構築され、徐々に家事支援や母親の障害認定、子どもたちの学習支援などにつながった。

まさに、これらの障壁の複数が生じているケース

情報の伝達、手続の複雑化

とにかく自治体の支援の情報も**こちらから調べないと分からない**し、支援自体が少なすぎる。

日本語が不自由で書類を書くことができない。
手続が面倒でサービス利用を諦めたことがある

本人による課題認知の不足

自分たちは困っていない。
（困っていることに気付いていない）

経済的に困窮しているが、中長期的な見通しが立てられない。**何をどうしたらいいか、分からない。**

心理的な障壁（拒否感・警戒感）

昔、支援を受けたときに嫌な思いをしたことがあって。**もう関わりたくない。**

家計も赤字だし、子育てもうまくできていないし、人に知られたら**「親として失格」と思われる**のでは

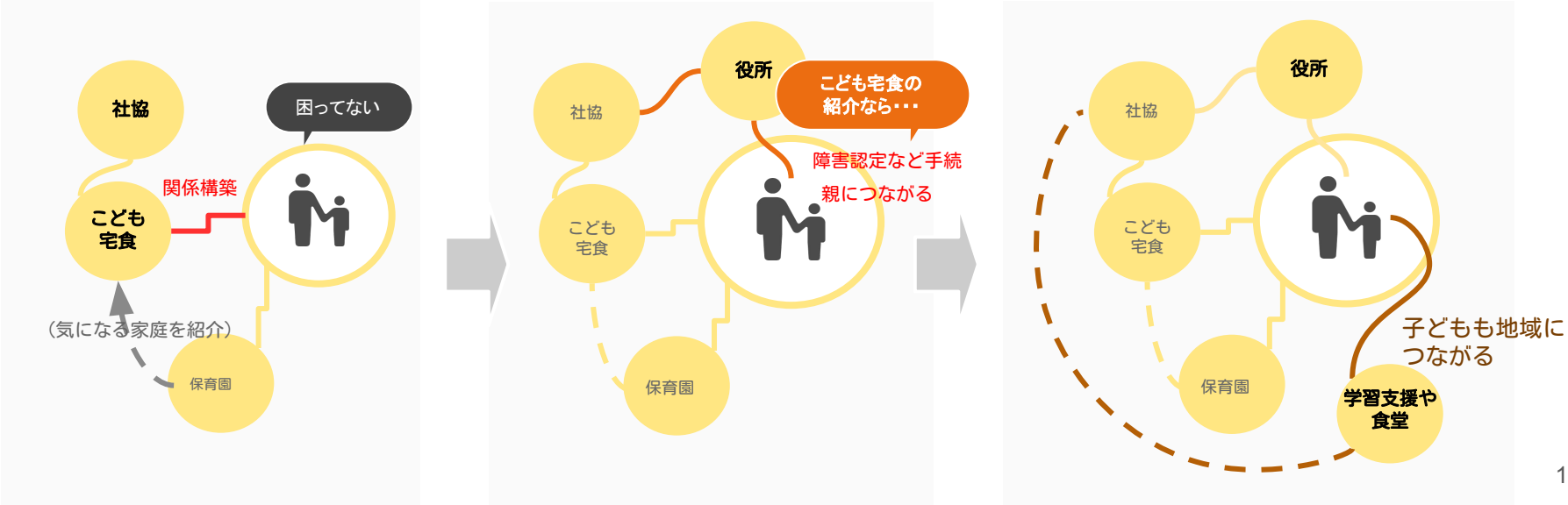
物理的な制約

仕事を掛け持ちしながら子育て。
平日の昼間に窓口に行く余裕がない。

フードバンクやこども食堂に行きたくても、**ガソリン代や駐車場台を出すお金の余裕がない**んです。

「ここが良かった！」ポイント

- ❖ 本人の主観的視点での支援ニーズは無いなかでも、**ライトな入り口のこども宅食で接点を確保**。
- ❖ 定期的に関わる中でポジティブな印象を持ってもらうことで、**次のステップとして根本的な課題について専門職がアクションを取りやすく**なった（例：障害認定などの手続）
- ❖ 子どもの支援ニーズも把握し学習支援につながる。関係ができた中で徐々に、**こども宅食以外のさまざまな伴走者が増えていくことで、”孤立”の問題も少しずつ低減**



地域の社会資源のなかでの こども宅食の位置付け・機能

定期的に自宅に食品を配送することをきっかけに、家庭とのつながりをつくり、関係性を築きながら見守っていく。
その中で、家庭の課題や変化をいち早く見つけ、様々な社会資源につないでいくことで、家庭の困りごとやつらい状況が悪化するのを予防していく。

「こども宅食」の事業の範囲

食支援＝**つながるフック**

食支援＝**定期的な接点**

事業周知・申込みの誘引
（家庭の発見）

関係構築、課題や状況把握

本人の行動変容を促すサポート

情報提供や社会資源へのつなぎ

地域の社会資源

ニーズに合った社会資源
専門的な相談支援や地域の居場所・市民サポートなど

「本人の行動変容を促すサポート」

こども宅食を利用する中で、最初は些細なことでも「悩みを言う」と「周囲が気にしてくれる、動いてくれる」の成功体験の積み重ねによって、本人の（援助希求力）も少しずつ変化

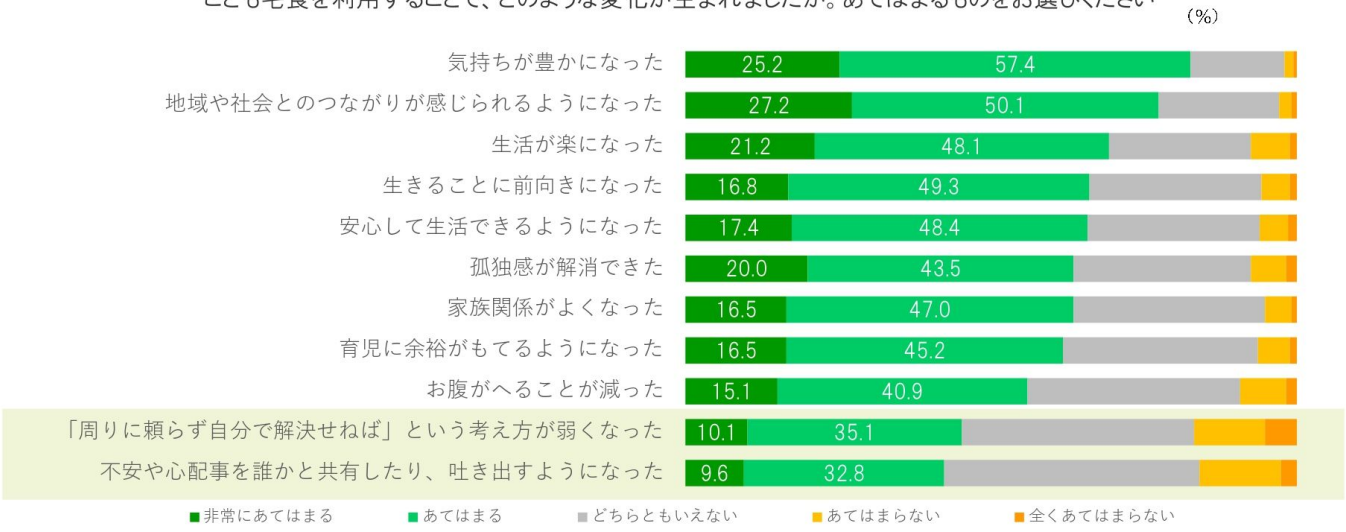
集計結果

こども宅食応援団

マインドセットの変化

「周りに頼らずに自分で解決せねば」という考え方が弱くなる、不安や心配事を誰かに吐き出すなど、他者との関わりに関する考え方に変化が生じている。

こども宅食を利用することで、どのような変化が生まれましたか。あてはまるものをお選びください



こども宅食利用家庭に関する実態調査（n=354）

今回参考にした文献

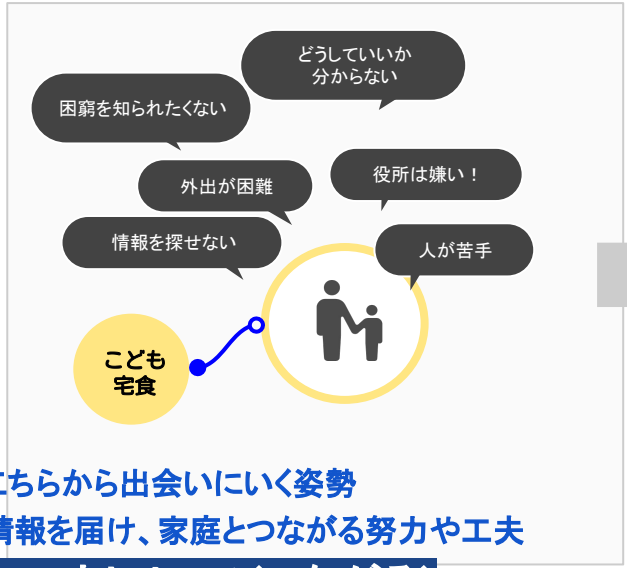
- **「『声なき声』に支援を届ける―新たなアウトリーチ展開のための調査―調査報告書」**、および、**「アウトリーチ事業の作り方　―必要性と活動の方法―（見えない当事者を発見するためのプレ・アウトリーチという考え方）」**（声なき声プロジェクト」内記事）いずれも特定非営利活動法人OVA
- **「事例から学ぶ　心理職としての援助要請の視点－『助けて』と言えない人へのカウンセリング」**水野治久 監／木村真人他 編（金子書房）
- **「社会福祉制度は『申請主義の終焉』を夢見るか」**横山北斗（note上の記事）
- **「児童虐待の予防を視野に入れた家庭訪問支援その1)-Healthy Families Americaの家庭訪問プログラムの概要と日本の家庭訪問事業の課題」**（白石淑江、2011年）
- **「保護者の被援助志向性の特徴と変化プロセスに関する質的検討」**（永井知子、2019年）
- **「伴走型支援 ― 新しい支援と社会のカタチ」**奥田知志、原田正樹／編（有斐閣）
- **「包括的支援体制の整備に係る現場での実践に求められる対人援助のアプローチとしての伴走型支援に関する調査研究事業」報告書**（令和3年3月一般社団法人日本伴走型支援協会）

「こども宅食」の可能性

こども宅食の可能性と、その先にあるもの

親子の抱える経済的困窮をこども宅食 "だけ" で解決するのは厳しい（もちろん一部、一時的には改善するが）。

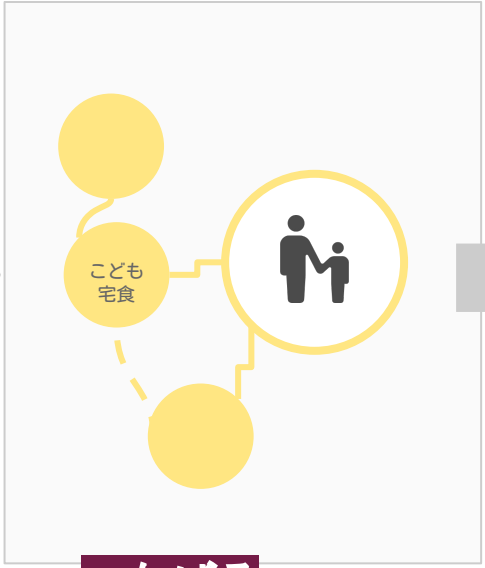
こども宅食で、つながりにくい親子につながるためのアクションを可能な限りとり（＝これがアウトリーチ！）、他の必要な支援や、人とのつながりを増やしていけたら..



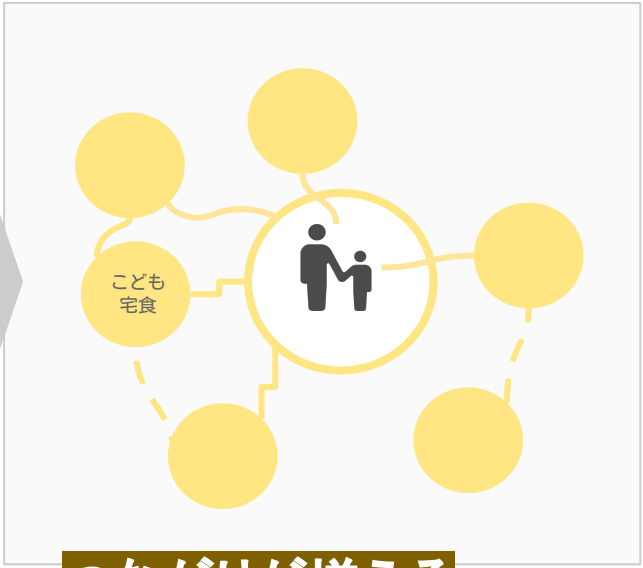
こちらから出会いにいく姿勢

情報を届け、家庭とつながる努力や工夫

＝アウトリーチ（つながる）



つなげる



つながりが増える

その他、当日の補足資料

◆松崎さんパートのこの図ですが、参考文献にある「伴走型支援― 新しい支援と社会のカタチ」(奥田知志、原田正樹／編(有斐閣))**の第7章「日本における伴走型支援の展開」**(原田正樹著)**を一部抜粋・一部要約しています。**

第１フェーズ　本人と関係形成「つながる」

・自ら支援を求めない人に**アウトリーチ**して関係を築く
　※「まず相手に支援者を受け入れてもらうことから」　"支援者臭"をださない
・「双方向で対話をしながら進めていく」、意思決定支援

第２フェーズ　本人・支援者と他の人達との関係「つなげる」

総合相談、多職種連携、専門職の拡充だけでなく
・相談窓口等への同行、通訳・代弁者として一緒に歩んでいく
・本人にとっては「怖いところ」である地域に出る最初の一歩を伴走する　など

第３フェーズ　本人を中心とした重層的な関係づくり

・地域で伴走者を徐々に増やす、専門家だけでなく地域住民も関わる
・ときに、当事者も伴走者になる（⇒他の誰かを支える、「相互実現的自立」）
・地域の偏見や、課題を抱える人の排除を減らしていくことも促進

◆課題のある人を発見し、支え合うことができる地域共生社会の実現

勝部さんも第４章を執筆！
ご一読することを
おすすめします！！

当日パネルで表示したまとめ

▼モニタリング目的の家庭訪問と比べ、「こども宅食のここが使いやすい 👍」という点（各地ヒアリング）

	モニタリング目的の単なる家庭訪問	こども宅食
利用家庭側からの見え方	❌**訪問は嬉しくない** ● 受け入れる理由がない ● 見張られていると感じる（監視）	👍 **嬉しい訪問（少なくとも自然）** ● 「食品」という大多数の人が嬉しい（がそこまでもらうのに気を遣わない） **“おみやげ”** 付きの訪問 ● 「食品を手渡す」という自然な訪問の理由
定期的な接点の確保	❌**定期的な訪問理由がない** （乳幼児全戸訪問事業など「全員が受けて当たり前」などの理由がないと不自然。）	👍 **定期的な訪問が当然の前提** ● そもそも「毎月届ける」というサービス ● 会えない場合でも、次の約束をしたり、様子を聞くなど接点を途切れさせないアクションが取れる
会話の糸口	**▲何も無いところから会話を作るスキルが必要**	👍 **持っていたものを会話の糸口にできる** ● 「食べ物」⇒最近の食事や体調のこと、 ● 「学用品」⇒進学や子どもの話、 ● 「マスク」⇒コロナの不安は無いか？ など
家の中の状況や子どもの様子を観察する機会	**▲理由を作り出す必要あり**	👍 **持っていく物の工夫で自然に状況把握につながる** ● 食品が重い ⇒「中に入って良いなら、台所まで運ぶよ」 ● 子ども向けグッズやお菓子 ⇒「直接手渡したいから、子どもを呼んでね」

こども宅食応援団からのお知らせ

こども宅食応援団が目指していくこと

こども宅食事業の数を増やし、より質の高い事業が実施できるように、
全国の現場と国と協働しながら、事業や制度の課題を解決していく。

全国の実施団体 自治体

事業を立ち上げる、運営する、改善に向けた試行錯誤をする

現場の課題を解決するための支援メニューを開発、提供する
先行事業のノウハウ集、研究や調査、食品・物資・資金の提供

実施団体同士が連携できるような実施団体間ネットワークを構築する
勉強会・研修の実施、こども宅食サミット等イベントでの連携強化

こども宅食応援団

現場の意見を踏まえた制度改善のためのロビイングを実施する
現場では解決困難な課題の可視化、予算や制度の使い勝手の改善、新制度の提案

国

制度を設計する、変える、周知する、新しい制度を作る

※NPO法人フローレンスと連携して2団体で実施

こども宅食応援団からのお知らせ

例えば、先行事業のノウハウ集

国の「支援対象児童等見守り強化事業」でこども宅食を実施している地域の訪問研修資料
（ボラティアスタッフ向け、相談員向けなど）

３　アウトリーチ（訪問活動）について

②　アウトリーチ（訪問活動）の基本的な流れ

☐訪問　☐入室　☐活動の説明　☑**食品等の手渡し**　☐会話　☐見守り観察　☐退室

活　動　内　容

食品など持ってきたモノを、バックや手提げ袋から手渡しする。

チェックポイント

✔どれか一つは**子どもに直接渡す or　親と一緒に受け取ってもらう**
- ➡　子どもの喜び＝関係構築、渡す際に子どもの観察もできる。
- ➡　渡すモノ＝子どもの年齢による。中学生以上、「受け取り確認」という役割を与える。

✔ひとつずつ**モノの紹介やコメント**をしながら渡す。
- ➡相手の様子や時間をみながら、渡すスピードは調整（詳細は後ほど）

こども宅食応援団からのお知らせ

例えば、食品のおすそわけや、国への提案活動

企業からの寄付品の全国おすそ分け

政府備蓄米の無償提供の実現・拡大